全卸連プレゼンツ　JPBA☆SSSカップ2023　11月18・19日　東京ポートボウル

魅せた！ベテランの意地と底力

優勝は 女子 姫路　麗 男子 小原照之

今年で5回目を迎えた“シニアスポーツサポート”のプロアマトーナメント『全卸連プレゼンツ　JPBA★SSSカップ2023』は、女子・姫路麗（33期・フリー）、男子・小原照之（32期・スターレーン）と、ともに歴戦のベテランが優勝。姫路は2年ぶり3度目の大会制覇で通算勝利数を歴代5位タイの33勝に伸ばし、小原は6年ぶりの勝利で通算7勝とした。（主催：全国化粧品日用品卸連合会／（公社）日本プロボウリング協会）

※7面に関連記事

◀男女優勝者の歓喜のガッツポーズ。姫路（左）は10月の千葉オープンアニバーサリーに続く今季2勝目、小原はジャパンオープン準V惜敗の無念を晴らす今季初勝利だった

学生時代からの盟友・扇一平ゼネラルプロデューサーとともに、2019年の第1回大会から本トーナメントをけん引してきた全卸連前会長の森友徳兵衛氏が今年3月に急逝。初日の開会式では「全卸連プレゼンツとしてのJPBA☆SSSカップは今回が最後」とのアナウンスがされたが、戦い模様は例年以上に白熱した。

女王が新人の台頭に「待った」

女子優勝の姫路は、予選6Gを首位と27ピン差の2位で通過。続く準々決勝3Gで自身4度目の800シリーズ（235・275・299）を達成してトップに躍り出ると、準決勝3Gは609とスコアを落としたものの、12G2837で悠々トップシードを獲得した。

▲「万音ちゃんとはランキングも争っているので負けるわけにはいかないという気持ちもあった」と姫路（左）。石田は「麗さんはすごいとしか思っていなかった人。チャンスがあるならもう一度対戦したい」と前を向いた

優勝決定戦の相手は、小久保実希との3位決定戦を制して勝ち上がってきた18歳の新人・石田万音。新人戦と山梨レディースで早くも2勝を挙げ、同世代の中島瑞葵と同様に男子並みのボールスピードと回転数で豪快なスプラッシュ音を響かせる石田に、姫路は「彼女のボウリングを目の当たりにして怖くない人はいない。緊張もあったし、怯んで逃げ出したくなったけど、その弱い自分に勝つんだ！と思って投げた」という。

果たして試合はピン差の大接戦に。3連発スタートの姫路に対し、石田はダブル後の3フレ④⑦⑨スプリットを見事にカバーして食らいつき、4フレからの4連発で逆にリードを奪う。

しかし8フレ、石田は「苦手」という⑩ピンカバーを「外ミスしないようにと思って投げたら手が回ってしまった」と痛恨のミス。姫路はこの機を逃さず、9フレからオールウェーを決めて再逆転し、勢いある新人の台頭に待ったをかけた。自身の8フレ1投目に⑥ピンを残した姫路は、同じ右レーンの10フレで「立つ位置を2枚、投げる位置を1枚内寄りに変えて」見事にアジャストする“匠の技”で魅せた。

「小学生になる前から知っている石田プロがこんなに怖い対戦相手になって、『時間が流れたんだな』『この間すごく努力したんだろうな』と。そういう感慨があって、今の自分のすべてを出し切った1ゲームでした」

試合直後のTVインタビューに、感涙に震える声でそう答えた姫路は、同様に涙を浮かべてそれを聞いていた石田に「またやりましょう」と、優しく声をかけた。

優勝ボール：RADICALクリプト・ブーム（サンブリッジ）

▲「公式戦のTV決勝は久しぶり。3位決定戦は緊張したが、優勝決定戦は思ったより体が動いて、コンディションも分かって投げていた」という玉井（右）だが、痛恨の1ミスで「きょうはすべてが噛み合った」小原に屈した

技巧派レフティーが復活V

男子の優勝決定戦は、プロ31年目・通算6勝の小原と、同26年目・4勝の玉井慎一郎という、優勝から久しく遠ざかっているベテラン同士のマッチアップとなった。

小原は2週前のジャパンオープンで見せた好調ぶりそのままに、準決勝までの12Gで2930を打ち、「ほとんど経験がない」というトップシードを獲得。対する玉井も3位決定戦で256の高スコアをマークし、2位進出の工藤貴志を退けての勝ち上がりと、戦前の勢いはほぼ互角。結果、勝敗を分けたのは小原のスプリットメイドと玉井の1ミスだった。

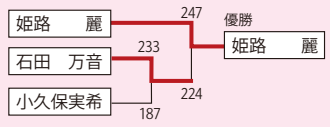
小原は2フレの1投目「力が入ってボールがこぼれた」と③⑨⑩を残すも、これを鮮やかにカバー。一方、玉井は5フレで⑩ピンを「ほんの少し顔が上がってしまって」まさかのカバーミス。この明暗が最後まで響き、勝利の女神は小原に微笑んだ。

「大会を通じて『何でこんなに』と思うくらい、すべてがうまくいった。前日練習にも来ていないし、優勝ボールも（オイル）パターン表を見て『要らないかな』と思って、当初は持ってくる予定がなかったもの。それがドンピシャでハマった。最近、上位にきたのはウレタンのときばかりで、リアクティブで優勝したのは久しぶり。50歳になったけど、もうちょっとできるかなという自信になった」と小原。完全復活した技巧派レフティーは、今後も優勝戦線を賑わせてくれそうだ。

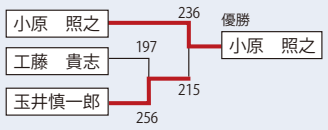
優勝ボール：RADICALボーナス・パール（サンブリッジ）

▲左から小久保、石田、姫路、小原、玉井、工藤の男女1～3位入賞者

●女子TV決勝ステップラダー



●男子TV決勝ステップラダー



WORLD TOPICS

新アスリート委員と情報交換

Vol.9 report 山下　知且

中国・杭州で開催されたアジア競技大会の期間中、アジアオリンピック評議会（以下OCA）アスリート委員会の選挙が行われました。

アジアの5つの地域から男女各2名ずつ、計10名を選ぶ選挙です。ボウリング競技からは、東南アジアゾーンで2名の女性が立候補しました。以前こちらで紹介をしたことがあるマレーシアのシャリン・ズルキフリ、そしてシンガポールのシェイナ・ウンです。

杭州アジア大会期間中にOCA史上初の試みとして、アジア大会に参加しているアスリートによる投票が行われ、シンガポールのシェイナ・ウンが、東南アジア女性代表委員に当選しました。ちなみに日本からは、東アジアゾーンで日本陸連アスリート委員長の戸邉直人さんが、第20回アジア大会開催国アスリートとして推薦され、委員に選ばれました。

▲11月下旬に来日したシェイナ・ウンを屋形船でもてなした

シェイナは言わずと知れた世界のトップボウラーです。2012年にQubicaAMFワールドカップで優勝。13年には日本で開催された世界ツアーのメジャー戦、インターナショナル・ボウリング・チャンピオンシップ・サポーテッドバイDHCで優勝。その後世界選手権などで数多くの金メダルを獲得し、PWBAでも2勝を挙げています。

▲2018年のラスベガスオープンで初のPWBAタイトルを獲得した

輝かしい実績を持つボウリング界のトップアスリートがOCAアスリート委員に当選したことは大変喜ばしく、意味のあることだと思います。

その彼女が11月下旬に日本を訪れるとのことで、東京で会うことになりました。8月にシンガポールで会った際には、数時間にわたってボウリング界の未来やアスリートのセカンドキャリアなどについて話をしましたが、今回も大変有意義な情報交換ができました。

2026愛知・名古屋アジア競技大会の実施競技入りに向かって、彼女の助けはきっと大きな力になると思います。

やました・ともかつ
1982年12月5日生まれ、長崎県出身。2000年～2011年ナショナルチーム在籍。2023年6月から長崎県スポーツ協会理事。全日本ボウリング協会理事。2023年4月から長崎県連副理事長。2022年からIBFアスリート委員。